

〔釋日本紀八述義〕日向國風土記曰、白杵郡内知鋪郷天津彦火瓊瓊杵尊、天降於日向之高千穗二上峯、時天暗冥晝夜不別、人物共通、物也難別於茲、有土蜘蛛、名曰大鉗、小鉗、二人奏言、皇孫尊以御手拔稻、千穗爲粃、投散四方、必得開晴、于時如大鉗等所奏、搓千穗稻爲粃、投散、即天開晴、日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號智鋪、

〔延喜式八祝詞〕大殿祭〇中

屋船久々遲命是木靈也、屋船豐宇氣姬命登是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋、以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中之類也、御名乎奉稱利、皇

御孫命乃御世乎、堅磐常磐爾奉護利、〇

〔倭訓栞前編四〕う。ち。ま。き。散米をいふ、大殿祭の祝詞の註に、今世產屋、以辟木束稻置於戸邊、乃

以米散屋中といひ、四時祭式の大殿祭條に、御巫等散米、酒、切木綿、殿内四角退出と見えたり、辟木は、屋船久々能遲命、是木靈也にあたる、束稻は、屋船豐宇氣姬是稻靈也にあたる、散米は、新嘗に枉津日神の入來らんを饗和して去らすため也、もと天孫日向高千穗の峯に天降りたまひし時より事起れる事、日向風土記に見えたり、産屋の打撒の事は、紫女日記に見え、客忤の打撒

の事は、源氏物語に見えたり、

〔政事要略二十六年中行事〕同日〇十一月十五日、宮内省奏、御宅田稻數事

同氏〇多米宿禰、系圖云、志賀高穴、太宮御宇若帶天皇〇成、御世、小長田命以米入大籠、而獻天皇也、因改

命宗、賜多米連姓、

〔本朝世紀〕長保元年三月七日庚申、午後左大臣、内大臣、著左仗座、召神祇官并陰陽寮、仰云、駿河國言上解文云、日者不字御山、燒由何祟者、即卜申云、若恠所有兵革、疫事、歟者、此間、太宰府貢上雨、米一裏、涌出油一瓶等、奏聞、即上卿覽了、下給辨官文、殿已了、其解文曰、

太宰府解 申請官裁事